



魂の郷地を求めて

高山 惠 忍

私の今日の恵まれた尊い一日を感激しながら静かに今日までの自分の過程を振り返つて見る時、或は山或は野原に夜露に打たれながら、佛を求めて歩いた姿は、丁度高野の山に父を求めた石童の心であつた、私の淋しい心を抱いて走馬燈のやうに流浪して歩いた順禮姿を忘るべくもあらずして、ひたひたと迫の追憶に包まれながら、進まない筆で書き付けたのが本篇である。『宗教家の天職に自覺せよ』とは私がミッシヨンスクルの門をくつた時に、最初に試みた演説の結語であつた。此時分の私はほんとうに若い宗教家としての熱血が漲つてゐてこの演説も眞に哀心の叫びであつた。そうして誰にも爲し得ない福音宣傳と云ふ貴重な天職にあることを心から幸福に思つてゐた。毎朝涼しい杉並木を通つては學校へ行く。私の目の前にはいつも前途の輝ける希望を抱いて一步步力強い足跡を踏みしめながら慣れの世界へ急いだのであつた。血に燃ゆる青年が地上のあらゆる権勢や肉の榮光を振り捨てて、飽迄も天國建設の爲に一生を捧げようと決心をしてゐたのだ。これほど堅い決心と熱い信仰とに燃へてゐた私が、今は『求めて與へられざるの悲哀を』かこたねばならぬとは、何んと云ふ昨日に變る今日の姿であらう。自分ながら今昔の感に打たれてしみじみと涙の慘む程淋しい悲しい感じに襲われる。實の處巖のやうに堅かつた私の信仰は根底から破壊されてしまつたのだ。暴風吹き荒ぶ冬の荒野のやうな淋しさが今の私の生活なのだ私は『眞に宗教家の天職を味識して永遠の生命を全うしなければならぬ』と深く自分の内面生活を凝視した時大きな懷疑に逢着したのであつた。この懷疑は今迄無條件で受入れて來たことの全べてを疑ひ初めた。かくて加へてたつた一人の母の死が人生に對する煩悶となつて火に薪を添へる様に深い々々懷疑の淵へと導いて行くのであつた。今迄愉快であつた學校の授

業もいやになつて教師の血の氣のない古典の解釋などはとても聞く氣になれない。生徒は生徒で卒業後の住職問題を論じ合ふ位が關の山で一人として、眞面目に人生の眞實さにぬかづくやうな者はない。私は其等の生徒と伍して、安價な生活を送るに餘りに年老ひて居なかつた。それから云ふものは學校を休んで、小川の邊りや靈廟のあたりで半日も考へ込んでゐることは珍しくなかつた。しかし懷疑は日一日と募つて行く。煩悶は益々繁くなつて来る。惱みのどん底の苦しみより伸び上らんとする焦慮は益々、いらだたしくなつてくる。一方には異常の緊張味を以て、讀書慾が鬱然として起つて来る。毎日學校の圖書室にうづくまつて、書物を漁つた。而し其だけでは、とても満足することが出来ない。で、知己の家の藏書を、片端から讀み倒した。而し斯る讀書は、少しも煩悶の解決とはならずして、却つて煩悶を増すばかりであつた。果ては、自分の心に、偉大なる力を與へてゐた、み佛の姿がだん々々々、掻き消されるやうになつては、一層焦慮せざるを得ない。若しも、私からみ佛の姿を見失つたならば、自分はたゞ自殺より外に、道はないと思つた時、私の心はメーテルリンクのチルチルにミチルが、青い鳥を追ふて、逍遙ふたやうに、佛の姿を追ふて行かねばならぬと、決心した。丁度昔、猶大の民族が、エホバの神のみ姿を追ふて、エヂプトの野を逍遙ひ歩いたやうに……。しかし私には何處迄行つても、漠々たる荒野が際限もなく、續いてゐる……。淋しい無神の荒野が。どうどう自分一人の解決にあまつた私は、先輩の人々の門を叩いて、一脈のライトを得やうとした。而し其は凡て徒勞であつた。解決の緒を暗示されるどころか、訪問する度に、『失望』の二字を深く々々印象される、許りであつた。實際、先輩や大家氣取つてゐる人々ほど、つまらないものはない。どんな悶へを持つて行かうと、其膝にすがらうと、をつに自分許り、覺り濟して通り一片の、概念的な、切口上しか、答ふべきものを心得て居ない。其ではどうして、悶へに燃へる青年の琴線に、觸れよう。有名な名士や説教家の教壇の下にも、ぬかづいて見た。而し其も少しも、心を遣める料とはならない。こんな具合だから、宗教家は無用の長物として、社會から、敬遠されるのであらう。推し考へて見るに過去幾白年の、時代思潮の流動は目まぐるしい程、變遷に變遷を、重ねて押流して行つてゐる。そして、民衆の心には、其都度、深い々々恨

跡を刻み付けて、行つたのだ。最早、現代人は、人間の生活を、靈の世界に至る階段と見るに、餘りに、強く、自我の尊嚴さを自覺してゐた。そうして、三四世紀の昔のやうに、極樂淨土の彌陀の像をおがんで、隨喜の涙を流しては居ない。あらゆる空虚な傳統を押し壊して、人間生活の上に靈の世界を建設しようとしてゐるのだ。斯ふした民衆の、時代思想の何んたるをも解せず、幾百年も昔の、先輩の説を踏襲するを以て唯一の節操と思つてゐる宗教家に、どうして人間の魂が救へよう。人間の迷ひや。人間の悶へに對する指針が説けよう。上海や大阪に、非宗教運動が起るのも無理はない。眞面目な人生の懷抱者や、悶への青年がどんな々々、既成宗教の手から雄れて行くのも無理はないと、思つた。あゝ眞の宗教は既成宗團を離れて存在するのだ。私はもう人の話なんか、聞く氣になれない。頼る者はたつた自分一人なのだ」としみじみと思ひ知つた。其時に思出したのは、幼き折に聞かされた、あわて者の話である。あわて者が、もうそろ々々春が來さうなものだ、一つ春を迎へに行かうと、革靴をはき辨當を携へて、海よ山よ、と探し廻つたが、春が見當らぬ。ガツカリして家に歸つて見ると、庭前の紅梅が、一輪咲いてゐるのが目に入つた。其處で『盡日尋春不得春、春在枝頭既十分』と詠したと云ふ。長い間を、さ迷ひ盡した私は、矢張自分自身の中に佛を見出さねばならなかつたのだ。と、云ふことが最後に判つた。全く自分以外に何處を見ても光はない。望みはない。只一人砂漠の中を流浪して歩く、旅人の姿なのだ。

さして行く笠置の山を出しより

天が下には隠れ家もなし

その儘の姿である。悶へ悶へ、あへぎあへぎ、して救ひは自分丈けだ。廣い世の中に、自分唯つた一人なのだ、と痛感した。而し其自分も『如何なる者か』となると、少しも判らなくなつて來る。すべての中心主觀である、自己が判らないのだから、世の中の萬象盡く不可解の關に包まれて、邊りはかすかな光だもない殆ど捨鉢になつて暮したことも、二月許り。實に精神牢獄其儘である。而しそんなになつても、私の心には宗教的要素がどうしても去らない。又ぞろ、思ひ直して、讀書し初めた。其の範圍は大分廣汎に亘つた。基

督教の教義や、信仰状態にも、没頭して見た。而し何等の根據もなく、理性的反看もない、只盲目的に感情を弄んでゐる、彼等の頭には、どうして透徹した、自我の意志が取り扱へやう。禪宗や眞言の書物も嚙つて見た。親鸞の信仰も叩いて見た。而し空想的假定の廢墟を、魂の住家と思ひ込んでゐる、思想には人間性の眞實さのある筈がない。斯うして、走馬燈のやうに、次から次へと、轉々して行つて遂に、哲學に解決を索めようとして、入つて行つた。當時非常な觀迎を以て紹介されてゐた、オイツケンやベルグソンの思想には尠ず、興味を覺へた。彼が永遠の人性の上に立つて、盡きざる奮闘を續けるのが、人生の眞諦であること云ふ自我肯定の氣魄には、心を惹かれてしまつた。而し探究に探究を重ねて思索して行つた時、どうしても哲學では充たされない、或る物、があることに氣がついた。矢張哲學と提携しても駄目なのだ。私は初めから、理論の整つた世界觀や、人生觀を得れば、それでよいと云ふのではない。止み難き宗教的要求が根本を支配してゐるのだ。かくして、既成宗教の何れにも、幽玄なる幾多の哲學にも、一點の光も見得なんだ私は殆ど失望の極に達した。いかに愚鈍な自分とは云へ、自分の頭の續く限り、根限り、もだへて求めたのに……、魂の住むべき郷地を發見出來ぬとは……、あ、思へば絶望の極、華嚴の瀧に身を投じた藤村操を、どんなにか懐しいものであつたらう。學校も休み、知己とも音信を絶つて、毎日ぶらぶら山の人氣のない處を歩き廻つたりしてゐた。かゝる絶對悲觀の折柄、遂に、日蓮聖人の眞意に觸れる機會に遭遇した。哀れな順禮が破産した淋しい胸を抱いて、上人の聖廟にぬがづいた時、心の奥深く々々、八重雲分けて閃き落ちた、一種不思議の光。私の心の奥の奥底迄、射通して行つた。廣い々々野原を涸渇に攻められながら、さ迷ひ歩いた順禮が、漸く清き泉を見出したやうに、アラビヤ砂漠の中に、オアシスを發見したやうに、私の心は喜びに振へた。日蓮聖人の一生、其は取りもなほさず、自我肯定の、深刻なる精神生活。自ら惡戰苦闘することによつて、靈の王國を心内に現化せんとする彼の意志。首座に坐つても、流罪に處せられても、自若として、眞の襟へと急いだ英傑の面影。彼の心は常に萬世を包含し、永遠の生命に呼吸してゐたのだ。私は上人を追憶することによつて、偉大なる力と信念を發揮し、この信念と力とに依つて永遠の生命を把握することが出

來ると信じた。今迄長い間求めて居たのはこれである。自分が人生の神秘に觸れてこそ、永遠の生命に生き人生を生かすことが出来るのである。自己の意志を通ずるにあらざれば、人生無意義なりてふことを、深く體驗した。哲理を要求する理智の方面には、一念三千の大哲學あり、教義内容の嚴正なる批判反省は、正しき信仰の合理性を保證し、絶對者即ち、久遠本佛の抱擁のもとに、魂は安らげく慰ひ、自己の意中に現化した、常寂光を作り出す、あゝこれこそ、人間生活の壯麗なる殿堂ではないか。思へば本佛の懐ろに寝つてゐた自分が、偶像や虚飾の城廓に障へられて、眞のみ佛の心を知らなかつた。そうして、家を飛び出して東西南北を流浪してさ迷ふたが、再び本佛のみ許に歸らねばならなかつた。而し其本佛は最早や、五重の塔や、優秀なる調刻を施した本堂の中にはなかつた。形式の偶像を離れた大自然の中に、自己の胸の奥深くに秘められてあるのだ。慰ふべき魂の郷土、其は日蓮聖人によつて教へられる永遠無窮の玉座であつた。假相を脱した眞實の樂園が展開されてあつたのだ。——(十一、九、二十一)——



能化と所化

深澤雪童

能化所化は師徒の關係である。教師と生徒、師匠と弟子、皆能所相對である。けれ共今自分は、道俗の能所相對に就いて考へて見たいと思ふ。若し、日蓮聖人に對し、又遠く大聖釋尊に對し奉れば、現在の道俗共に悉く所化である。而も其の所化たるや、壽量品に於て、能化佛陀の久遠成道顯本と共に、我々も久遠已來の所化である事が顯されたのである。

扱て其の道俗相對に就いて考ふるに、能所共に、責任即實踐すべき道がある。先づ能化の責任を云へば、